

松 山 大 学 論 集
第 28 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 1 6 年 6 月 発 行

第一インターナショナル，集権派ジュネーヴ大会
(1873年9月8日～13日)

渡 辺 孝 次

第一インターナショナル，集権派ジュネーヴ大会 (1873年9月8日～13日)

渡 辺 孝 次

目 次

はじめに

第1章 分裂からジュネーヴ大会までの動き

1. 往復書簡から見るマルクスらの見通し
2. 大会直前の攻防

第2章 大会の様様

1. 代議権審査と出席者
2. 総評議会や各支部の活動報告
3. 議題と決議

おわりに

は じ め に

1864年9月28日にロンドンのセント・マーチンズ・ホールで創立された国際労働者協会（別名「第一インターナショナル」，以下主にこちらの呼び名を「第一インター」と略して用いる）は，1860年代末までは順調に成長した。ところが，スイスのフランス語圏でジュネーヴとジュラ地方の諸支部の間に対立が生じ，それにマルクスとバクナーニンが関与したために，スイスの片隅の問題は国際的な対立に発展した。そしてついには，1872年9月2日～7日にオランダのハーグで開かれた大会で，マルクスらが率いる総評議会を支持するグループと，それに反発するグループに分裂した。スイスに関しては，ジュネーヴとドイツ語圏の諸支部は総評議会を支持し，バクナーニンの協力を得たジュラ地方の諸支部は，反対派の中心的存在となった。

分裂から1週間後の1872年9月15日～16日に、総評議会に反発するグループ（「反権威主義インターナショナル」と呼ばれた）はスイスのジュラ地方の町サン・ティミエで自派だけの大会を開き、ハーグ大会で下された決議を認めないこと、ニューヨークに移された新しい総評議会の権限を認めないことを宣言した¹⁾。

そのさらに1年後の1873年9月上旬、両派はどちらもスイスのジュネーヴで年次大会を開いた。「反権威派」がどのような議論をし、何を決議したかは別の論文で紹介する²⁾。ここでは、ハーグ大会で所在地をロンドンからニューヨークに移した新しい総評議会を支持するグループの動向と、この派が開いた大会の様相を考察する。大会開催期間は1873年9月8日～13日で、反権威派が大会を開いた翌週であった。しかし結果は惨めで、ほとんど大会として成り立たなかった。マルクス自身、新総評議会の議長になったニューヨークのゾルゲ³⁾への手紙で「大会は大失敗 Fiasco だった」と形容している⁴⁾。

第1章 分裂からジュネーヴ大会までの動き

1. 往復書簡から見るマルクスらの見通し

まず、ハーグでの分裂から翌年のジュネーヴ大会開催までの1年間、マルクスやエンゲルスが第一インター内の動きをどう見ていたかを、彼らが交わした書簡を材料にまとめてみよう。希望的観測や願望が含まれているからか、1873年7月までの手紙の文面から見る限りでは、両派の抗争に関して彼らはかなり楽観的に構えていたようである。少なくとも大会直前まで、その後に「大失敗」が起こることなどはまったく予想していなかった。

1) 1872年10月5日付、エンゲルスからゾルゲへの手紙（書簡216）⁵⁾

同年9月15日の午前中に開かれたジュラ連合のサン・ティミエ臨時大会が、ハーグ大会で下された決議、新しく任命されたニューヨークの総評議会、そしてバクーニンとギヨーム⁶⁾の除名処分のすべてを否認したことに言及し、無視

できないとしている。しかし、これとは別に、同日午後には国際会議としてのサン・ティミエ大会が開かれたことに関しては、エンゲルスはまだ詳しく把握していなかった。ただ、スペイン、ベルギー、オランダがジュラ連合を応援していることだけは知っていたらしい。実際には、単に応援していただけではなく、ジュラ連合の臨時大会が開かれた日の午後と翌日に国際会議が開かれ、その場で重要な4大決議が下された⁷⁾。また、国際会議への出席者も、実際にはスペイン代表4名、イタリア代表6名、フランス代表2名、アメリカ代表1名であり、エンゲルスの把握は正確ではなかった。

2) 10月29日付、エンゲルスからクーノ⁸⁾(在ニューヨーク)への手紙(書簡219)

ジュラ連合の起こした動きは単なるスイスの片隅の問題ではなく、国際問題に発展したようだ。対抗するために、総評議員になることを渋っていたゾルゲが補欠選挙で総評議員に選ばれ、その議長になった。事態を収めるために、今後反権威派の大会に出席した者を除名処分しなければならないだろう、と述べている。

3) 11月16日付、エンゲルスからゾルゲへの手紙(書簡221)

①ブランキ派が離反したこと⁹⁾ ②スペインでは、ハーグ決議とサン・ティミエ決議のどちらを支持するかを各支部に問う動きが起こっているが、おそらくハーグ決議支持の方が勝つであろうこと。③イギリスではヘイルズ¹⁰⁾が連合評議会を反権威派に取り込んだこと。④イタリアにはまったく味方がいないこと。⑤ジュラ連合については、ローカル大会としてのサン・ティミエ大会が下した決議で、彼ら自身が第一インターから脱退したと宣言しているに等しいから、そのように扱うのが順当であることを述べている。

4) 12月7日付, エンゲルスからゾルゲへの手紙(書簡224)

①オランダについて、反権威派には加わっていない、今後も中立な立場を保つ見込みである、としている。②スペインに関しては、ハーグ決議とサン・ティエ決議のどちらを支持するか諸支部に決断を迫ったスペイン連合委員会のやり方を、マルクスの娘婿であるポール・ラファルグが中心となって結成された新マドリッド連合が規約違反であると訴え、この委員会に対する不信任を求めていることを説明している。③フランスについては、リヨン以外はハーグ決議を支持していること、セライエ¹¹⁾に全権委任を新総評議会が与えることが必要である、と述べている。④イギリスに関しては、ヘイルズの優位は揺るがないが、反対派も力をつけてきていると説明している。

5) 12月21日付, マルクスからゾルゲへの手紙(書簡228)

イギリスでヘイルズの率いるイギリス連合評議会の多数派と、ハーグ決議を支持する少数派が分裂したこと。マルクスに言わせれば後者こそが正統性を持つこと、を述べている。

6) 1873年1月4日付, エンゲルからゾルゲへの手紙(書簡230)

①イギリスでは連合評議会が分裂して、ヘイルズ率いる多数派が少数派から脱退したこと、ジュラ地方出身のユング¹²⁾がヘイルズ支持に回ったこと。②ベルギー大会はハーグ大会の決議を否認した。③スペイン大会でも同じ動きになるだろう。④反旗をひるがえしたのはジュラ、ベルギー、スペイン、イギリスの多数派だが、彼らはハーグ決議を否認することで規約違反を犯し、自ら脱退を宣言したのと同じだから、そのような扱いをすべきである。⑤イタリアでは、ロンバルディア地方の町ローディの『プレーベ』紙だけが唯一の味方だ。だから、宝石細工師がストライキを起こしたジュネーヴになどではなく、ローディにこそ資金援助をするべきだ。ウーチン¹³⁾を含めジュネーヴの連中は、求めるばかりで何もしない。⑥新総評議会はフランス語圏のジュラやベルギー

とはフランス語で、イギリスとは英語でやり取りしているようだが、相手が文法的誤りなどにつけ込む危険性があるから、母語話者のチェックを経ずに公式文書を作成し公表したりしてはいけない。

7) 2月12日付、マルクスからボルテ¹⁴⁾ への手紙 (書簡 235)

①イギリス連合が大会を開き、その場でユングがこれまでのいきさつを暴露したことに對し、人間というもの自分がのけ者にされたと感じると、途端に俗物になるものだ、と批判した。また②総評議会が1月5日の決議でジュラ連合を資格停止にした¹⁵⁾ のは誤りであったと批判した。なぜなら、部分的に規約に違反している相手なら資格停止にもできるが、ジュラ派は総評議会の率いる協会という組織の存在そのものを否定している。だから彼らにとってその組織は存在していないのと同じであり、それに所属していないのと同じだからである。言い換えると、その相手は脱退宣言をしている、とみなすべきだからである。③これまでのようなやり方を続けるなら、ジュラに続いてスペイン、イタリア、ベルギー、イギリスの反対派も資格停止処分にせねばならない。彼らは、自分たちだけの大会を開くつもりのようなようだが、もしそれが失敗に帰したら、資格停止に異議を申し立てるために、総評議会の開催する大会に大挙して押しかけるだろう。だから、脱退宣告をする必要があるのだ。

8) 3月20日付、エンゲルスからゾルゲへの手紙 (書簡 239)

①南フランスで第一インター会員の斉検挙があり、ハーグ大会で総評議会支持者としてふるまったファン・ヘッデヘム¹⁶⁾ とダントレーグ¹⁷⁾ が捕まり、前者は警察への密告者と判明し、後者もそうかは不明だが、所持した文書から会員名が警察に漏れたという事実を知らせている。②総評議会が1月26日付で出した、ジュラ連合は脱退を表明したものとみなすとする決議¹⁸⁾ はとてもよいと評価。③ユングやヘイルズがハーグ大会について行った非難が、反対派の各新聞に出回っているとしている。

9) 4月4日付, マルクスからベッカー¹⁹⁾(在ジュネーヴ)への手紙(書簡242)

①『資本論』の仏訳, 独訳などの準備のために忙殺され, 手紙を書く時間が取れなかったこと。②目下同盟²⁰⁾の正体を暴く文書を作成中で²¹⁾そのために, ジュネーヴで1868年に出された同盟の綱領を送ってほしいこと。③『エガリテ』²²⁾がまだ出ているなら送ってほしいこと。④総評議会は次の年次大会をおそらくジュネーヴで開催するだろうから, 反対派が大挙して押しかけてもはねつけられるよう, 地元の力を結集する必要があること。

10) 5月3日付, エンゲルスからゾルゲへの手紙(書簡243)

①メンバーのセライエとオーバーヴィンダー²³⁾の擁護。②ファン・ヘッデヘムはハーグ大会の当時から警察のスパイだったこと。ダントレーグは恨みを抱く何人かの氏名を警察に漏らしただけであること。③次の大会開催地の候補はジュネーヴしか考えられない。ドイツ語圏スイスでは味方が足りない。他国からの参加見込みは, まずフランスは, 南仏が警察の手入れを受けたばかりで無理だろう。ドイツも無理だろう。デンマーク, スペイン, イギリスも当てにできない。ジュネーヴでは, 少なくとも同盟にうんざりしている者たちが対抗勢力になるだろう。ただし, 大会招集に先だって, 1月26日に出した総評議会の, 次のグループは第一インターを脱退したとみなすという決議を再確認することが重要だ²⁴⁾その対象となる団体は, ベルギー連合, スペイン連合, イギリス連合, ジュラ連合, イタリア連合である。

11) 6月14日付, エンゲルスからゾルゲへの手紙(書簡244)

①6月1日～2日にマンチェスターで開かれた反ヘイルズ派の大会が成功したこと。②ジュラ連合が, 総評議会が招集する次の大会には参加しないと決議したことは大歓迎であること。③6月1日～2日にオルテンで開かれたスイス労働者大会には, ジュラから5人代表が出席したが, 浮いた存在だったこと²⁵⁾④大会開催予定の9月1日より2ヶ月前までに議案を作成し招集しさえすれ

ば、大会はきつとうまくいくだろう。

12) 7月26日付、エンゲルスからゾルゲへの手紙(書簡248)

①ニューヨークから総評議会の代表を送ることが難しいので、セライエを説得して任せたこと。②自分とマルクスも行かざるを得ないが、行かずにすめばありがたいこと。

2. 大会の直前の攻防

上記6月14日付のエンゲルスの指示に従って、ニューヨークの新総評議会を率いるゾルゲは1873年7月1日付で、次の年次大会を9月8日からジュネーヴで開催するという招集通知を各国支部・連合に送った。ところが、開催直前にあまりに多くの致命的な不都合が起こった。そのためマルクスやエンゲルスは追いつめられ、最後はこの大会を第一インターの年次大会ではない、単なるジュネーヴの一地方大会に格下げしようと考えた。そしてそのために、最初はロンドンに住むセライエをニューヨークの総評議会の代表としてジュネーヴに派遣しようと考えたが、結局彼の出席もやめさせてしまったのである。

一体、大会直前になって何が起こったのか？ それを知るには、大会直前、さらに直後のマルクスやエンゲルスらの手紙を吟味する必要がある。

13) 1873年8月29日付、マルクスからエンゲルスへの手紙(書簡41)²⁶⁾

①セライエが今来ているが、ジュネーヴに行くことに乗り気でない。②ジュネーヴのペレ²⁷⁾から手紙が来て、(1)ロマン連合は、ハーグ大会が総評議会に与えた権限を無効にしようと考えている、(2)ロマン連合は、イギリス支部の委任状を認めない、(3)だからロマン連合には、イギリス支部の委任状を受け入れて代理するつもりはない、と書いている。③こんなことが起こっては、セライエを大会に送るべきではない。

14) 8月30日付, エンゲルスからマルクスへの手紙(書簡42)

①セライエは行かない方がいいという君の提案はもっともだが、行くよう説得したのは僕なので、正反対のことを命じることはできない。セライエは自分でどうすべきか考えねばならないだろう。②ただ、総評議会の年次報告だけはフランス語に訳してジュネーヴに送る必要がある。

15) 8月30日付, マルクスからエンゲルスへの手紙(書簡43)

ペレからイギリス連合評議会の書記に來た手紙を見る機会を得た。それによると①ハーグ大会で総評議会に与えられた無制限の権限は取り上げられねばならないとジュネーヴ人たちは思っている。②総評議会がジュラ連合をもっと厳しく処罰すれば、ジュネーヴはジュラのいくつかの支部からも支持を得ることができるだろう、としている。③しかし、彼らはオルテンで開かれた労働者大会が下した決議には不満を表している。彼らは常に、偏狭な地方的立場に立っているのだ²⁸⁾

16) 9月3日付の, エンゲルスからマルクスへの手紙(書簡44)

①ペレたちはまったくの俗物で、ジュラのいくつかの支部を味方につけようと妥協案をもちかけているのだ。②仮にわれわれが出かけていっても、すでにそのような決着が着いていただろう。③反権威派がわれわれに仕掛けた喧嘩も大したことない。わずか30人しか出席者がいないとは²⁹⁾

17) 9月27日付のマルクスからゾルゲへの手紙(書簡253)

ジュネーヴ大会の大失敗はやむを得なかった。①アメリカから代表が來られなくなった時点で、すでに不利になった。もし代わりに私やエンゲルスが向ければ、新総評議会は操り人形にすぎないという敵側の非難を裏付けてしまっただろう。②イギリス連合は來る努力を怠った。③出席できるのはジュネーヴ地方の者ばかりになることが確実にされた状況で、ペレらの離反の手紙が届い

た。添えられたパンフレットで彼らは、頭脳労働者の排除など、ジュラの連中よりひどいことさえ主張している。④この手紙が届いたので、セライエを行かせるのをやめさせ、会を単なるジュネーヴ地方の一地方大会に見せるという作戦に切り換えた。

しかし、開催地ジュネーヴに住んでいたベッカーの考えは違った。地元ジュネーヴの労働者の間に反乱が起きたこと、総評議会をジュネーヴに移そうという動きがあることなどを知り³⁰⁾、ベッカーは重大な危機感を抱いた。だから何としても、大会の場で多数を占める必要があると考えた。しかしジュネーヴだけでは、代議権を割り振ることのできる支部の数に限度があった。悶々としていたところへ、たまたま大会の2日前にオーストリアからオーバーヴィンダーが到着し、彼が持参した分も含めて、ベッカーは「魔法のように13もの代議権をひねり出した」。そして、それを味方の間に割り振ったのである³¹⁾。結果的に、大会出席者は30名程度になり、そのうちペレらの味方は10名弱にとどまった。

第2章 大会の模様

1. 代議権審査と出席者

集権派がこの時開いた大会の異様さ、惨めさは、正式な議事録が一切残されていないという現実に如実に示されている。そのため、第一インターに関する膨大な資料を集めたフレモン編の資料集も、この大会に関してだけは、イギリスの『ザ・タイムズ』紙などの記録で代用させている。しかし記事の記録は完全ではない上、『ザ・タイムズ』紙の通信員を務めていたのは反対派に回ったエッカリウスであった³²⁾。彼は前の週に開かれた反対派の大会から「はしご」して、集権派の大会にも見物客として参加し、様子を『ザ・タイムズ』紙に書いて知らせたのであった。このような事情があつては、記事が中立公正で正確であることは望み得なかった。

1) 9月7日(日)前夜祭。午後8時～11時。

大会の前夜に、会場となった Hôtel de la Navigation³³⁾ で前夜祭が催された。まだ代議権審査を終えておらず、全員が客扱いであった。午後8時に、ジュネーヴ支部の書記長であるジョスロン (Josseron) が壇上に上がり、幸い翌日から大会を開くことができると挨拶した。この前夜祭の出席客は500名ほどで、女性が40名ほどいた。このような場の雰囲気は、通常なら和気藹々であるはずだが、実際は早くも非難の応酬になった。非難はバクーニンらが無神論を唱えたこと、コミュニオン亡命者が災いをもたらしていることなどにも向けられた。総評議会派と反対派の対立以外にも、いくつかの「火種」があったことが分かる³⁴⁾。

2) 8日(月)午前、非公開の運営上の会議

翌日に大会が始まると、まず、多言語に対応できる者から成る代議権審査委員会が任命された。提出された代議権は28名分で、その真偽が審査され、すべて認められた。代議権の出所は様々であったが、受任者はほとんどがジュネーヴに住む者で、外から来た受任者は5～6名だった。受任もすべて認められた。ジュネーヴの中央支部を代表する2名は女性であった。筆者の知る限り、これまで女性が大会の代議員を務めた例はない。このことから、ベッカーらが苦し紛れに代議権を割り振ったことが見て取れる。代議権がすべて出そろったので、午後は3時開会と決まった。

3) 8日(月)午後3時、公開会議

午後3時にジョスロンが、議長席に座って開会宣言を行った。通信員として報告記事を書いたエッカリウスは、会の模様を、本来いるべき反対派が不在なので、重要人物を欠いた会という印象だったと形容した。さらに彼は、ニューヨークの総評議会の代表も、その代理であるセライエも来ない、寂しい会議であるともしている。

会は事務局の選出に移ったが、それに際しデュラン＝サヴォヤ (Durand-Savoyat) が、事務局の構成員は、各地の連合から公平に選ぶべきだと提案した。しかし、ジュネーヴのいくつかの支部が代表を出しているくらいで、いかなる連合も代表を送っていないから提案は無意味だ、と却下された。会の現実をよく示す出来事であった。

事務局は結局、議長がデュパルク (Duparc)、副議長がファン・デン・アベール (Van den Abeele) とジョスロン、ドイツ語書記がグーツマン (Gutsmann)、フランス語の書記がデュラン＝サヴォヤに決まった。さらに書記には補佐が必要とされ、ドイツ語がホーフェラー (Hoferer)、フランス語がバザン (Bazin) に決まった³⁵⁾

オランダ代表のファン・デン・アベールは、こちらの大会にも出席しただけでなく、副議長になった。代議権を認められた28名の内訳は、反乱を起こしたベレらのグループ代表が7～8名、残る20名ほどがベッカーのグループだったと思われる³⁶⁾

2. 総評議会や各支部の活動報告

1) 総評議会の年次報告 (8日午後、公開会議, 9日午前、非公開会議)

議題について話し合う前に、8日午後に総評議会の年次報告³⁷⁾が読み上げられた。本来読むはずだったセライエが欠席したため、おそらく議長が読んだと思われる。『ザ・タイムズ』の記事はその内容を、「報告というより宣言に近かった」としている。実際、総評議会の年次報告は「協会を分裂させようとする試みは失敗した」を各国についてくり返しているだけで中身に乏しい。報告の朗読が終わったのは午後6時15分前であった。そして、6時には会場を空けねばならなかった。報告について議論をする時間はなく、翌日は朝9時から非公開の運営上の会議、午後2時から公開会議を開くことが決められて、この日の会合は終わった。最後に議長が、協会に加入していることが証明されれば、立場を問わず、誰でも非公開の会合にも参加し発言することができると告

げた³⁸⁾

翌9日の午前中に非公開会議が開かれた。主に、協会の会計と運営に関する総評議会の非公開の報告が読み上げられた。会議の内容について唯一記録のあるウィーンの新報には、その中でブランキ派のとった行動が強く非難された、とある³⁹⁾。しかしフレモン編の資料集に収録されている報告の現物を見る限り、非難されたのはブランキ派というよりファン・ヘッデヘムである⁴⁰⁾。それより関心を惹くのは、この非公開の報告でゾルゲが「われわれはこの大会で、総評議会をまたヨーロッパに戻すよう求める」と主張していることである⁴¹⁾。一見何かの間違いであるかに思えるが、8月8日付で新総評議会在、代理として大会に出席することになっていたセライエに宛てて書いた指示書にも、「総評議会をヨーロッパに移転させることを提案して欲しい」と書かれている⁴²⁾から間違いない。察するに、ゾルゲには総評議会の任務が重荷だったのだろう。理由は異なるが、奇しくも総評議会の議長のゾルゲと、ジュネーヴの離反グループが同じことを考えていたわけである。そして、マルクスらの古くからの友人なのに、ゾルゲと上に紹介したベッカーはまったく逆のことを考えていたのだった。総評議会をヨーロッパに戻して肩の荷を降ろしたいゾルゲ、ジュネーヴ大会を流産させようとしたマルクスやエンゲルス、そして大会を成立させ、自分たちのグループが牛耳ろうとしたベッカーと、古くからの友人同士がまったくばらばらのことを考え、行動していたのである。

2) 各地の支部・連合の活動報告（9日夜・10日夜、公開会議）

午後2時に予定されていた公開会議は夜に変更されたようで、それは夜8時から開かれた。この会にも女性客が多く見られた。各国新聞の説明によれば、多くは「ロシア出身のニヒリスト女学生」で、派手な身なり、ショートカットの髪型、葉巻をふかしていることなどで衆目を惹いたという。また彼女らは皆「人類の共産主義的生まれ変わり」が必要だと信じており、そのためにスイスの大学で学んでいる、とされた⁴³⁾

活動報告は、まず唯一のドイツからの代議員であるシュトゥットガルト代表のブルクハルト (Burckhardt) がドイツの状況について報告した。ドイツでは依然として警察による弾圧が激しいこと、第一インターの内紛も、それまで無関心だった労働者に関心を持たせる効果を挙げていること、イギリスの労組活動は素晴らしい、などと述べた⁴⁴⁾

ついでドイツ語書記のグーツマンがスイスの状況を報告した。労働運動を権威主義的に導くことはできないと信じる。初めのうちは言語の壁があり、第一インターへの大量加入は起こらなかった。新聞も協会に対し好意的でなかった。しかし、今年労働者大会が開かれ、1万人を代表する82名の代表が参加した。この団体は労働者同盟という組織を生み出したが、最大グループを成すグリュートリ協会などはナショナルな関心が強いので、この組織を第一インターに加盟させることは見合わせた、と述べた⁴⁵⁾

次にロマン連合を代表してバザンが、前のロマン連合は解散したと発言した。後で述べる、ペレらの離反が原因だったと思われる。オーストリア代表はオーバーヴィンダーだった。かなり長く報告し、①オーストリアでは1860年頃、ある程度の政治的自由が得られたこと、②1868年のニュルンベルク大会、1869年のアイゼナハ大会に、オーバーヴィンダーを含む4名の代表が出席したこと、③アイゼナハ大会後に警察の弾圧が強まったこと、④そのため、『フォルクスヴィレ Volkswille』などの労働者新聞の維持がむずかしくなったこと、⑤選挙法改正をめぐることは、これを支持するグループと反対するグループに労働者が分かれたことを述べている。最後にジュラ地方の中立的支部を代表してデュラン＝サヴォヤが、労働者の生活に実際の益をもたらさないただの論争は不毛であると主張し、彼の属するムチエ支部では、食料品や肉屋、パン屋の協同組合や労働者食堂がうまく機能していると報告した⁴⁶⁾

翌10日の夜も支部の活動報告が続いた。オランダを代表してファン・デン・アペーレが発言しようとする、彼同様、反権威派の大会から「はしご」して2つの会に出席し、集権派の会の様子を見物していた出席者が狂ったよう

に笑い出し、会が一時中断されるという騒動があった。前述した1872年12月7日付のエンゲルスからゾルゲへの手紙に書かれているように、オランダ連合は連合としては中立な立場を取ったが、反対派を支持する支部と総評議会を支持する支部があった。そして、後者であったハーグ支部から委任を受けたため、アペーレはこちらの会にも出席し発言した。しかし、数日前に総評議会の存在を否認した者が、まったく正反対の性質を持つ会議に出て報告することは滑稽であり、茶番だと受け取られたことを示す出来事であった⁴⁷⁾。その後チューリヒ、バーゼルの代表が発言した後、ジュネーヴ近郊の町カルージュの支部を代表してアンリ・ペレが発言した。その際彼は、ハーグ大会で分裂した第一インターの現状を分析し、それをもたらした知識人を告発するパンフレットを配った。以下項目を改めて、その内容に関してまとめる。

3) ペレらが配布したパンフレット

パンフレットはかなり長く多岐に渡った⁴⁸⁾。その基本的性格を知るために、最後の締めくくりとされている文章をまとめると次のようであった。「今起こっている対立は本質的なものではなく、何人かの、労働者の外にいる者たちがもたらしたものである。協会の本来の目的に立ち返り、組織を引っかき回している者たちを遠ざければ、連帯は戻ると信じる。協会は部外者の意見に捕らわれず、労働者本来の関心に立ち返るべきである。」ここでは、論点を(1)知識人と協会の関係、(2)総評議会の性格、に限定してまとめる。

(1) 知識人と協会の関係

パンフレットの最大の特徴は、ハーグ大会で起こった分裂は労働者が望んで起こったことではなく、一部の知識人たちが持ち込んだイデオロギ的対立が原因で起こったと捉えたことである。そしてこの把握は、当時多くの労働者の間に共有されていた。対立を持ち込んだ人物として、マルクスやエンゲルスとバクニンがイメージされていたであろうことは容易に想像がつく⁴⁹⁾。しかし

パンフレットはそれだけでなく、問題をもたらした知識人としてジュラ地方の「ドクターと教授」を挙げた。ジュラ地方における支部開拓の先駆者であった医師のピエール・クルリー⁵⁰⁾と実業高校の教師であったギヨームのことである。具体的には、1868年まで、ジュネーヴの支部もクルリーの編集する新聞⁵¹⁾を機関紙とし、彼の影響を受けていたこと、それ以降はギヨームの率いるグループと対立に陥り、70年4月にロマン連合が分裂したことを指している。

バクーニンに関しては、①ジュネーヴに無神論のような、労働者の関心と無縁な思想を持ち込んだ。②政治的集権主義という誤った方針を持ち込んだ。③彼の仲間ガリヨンで、コムニオン運動と称して愚かな行為を犯したことなどが非難された。

他方でマルクスらもやり玉に挙げられ、①彼らの唱える集権化と権威の尊重をパリ・コムニオンの運動に適用してそれを救うべきであったのに、救えなかった。②強引なやり方で、多くの活動家をバクーニン支持者にしてしまった。③パリ・コムニオンが鎮圧された後に、総評議会に、協会員ではないコムニオンの活動家を自己補充したこと。それによってブランキ派が制御できなくなると、総評議会をニューヨークに移転させるという致命的な過ちを犯したこと、が批判の対象となった。

以上を受けてパンフレットは次の主張を行った。協会の規約の第3条には、協会は「各国労働者 *ouvrier* を代表する」とある。しかるに *ouvrier* の代わりに *travailleur* の観念が幅を利かせ、頭脳労働者の独断専行を許した。このことを考慮し、今後頭脳労働者の過度の介入は阻止すべきである。他方で頭脳労働者自身に関しては、介入を自制ができるかどうか、真に労働者の味方であるかを測る試金石である、と主張した。

(2) 総評議会の性格

パンフレットは、総評議会に関して、①手の労働者を中心にすべきである。②所在地をずっとロンドンに固定したことはよくなかったが、それをニューヨ

ークに移転したことはさらによくはない。総評議会の所在地はヨーロッパであるべきである。③パリ・コミューンが鎮圧された後に総評議会が、協会に属さないコミューンの活動家（イメージされているのはブランキ派である）を総評議員に補充したことは害が大きかった。今後総評議員の任期は1年間とし、再選を認めず、メンバーの自己補充も認めるべきではない、とした。

4) パンフレットをめぐる議論（11日午前、午後、公開会議）

翌11日は、ペレらが前夜に配ったパンフレットをめぐって議論がくり広げられた。まずペレは、各支部の報告から、分裂によって協会が力を失ったことは確かなようだ。具体的な活動をなおざりにし、抽象的なイデオロギー闘争に没入したことが分裂の原因だったと主張した。もっと労働組合的な活動に力を入れるべきであり、そうした面を強化していけば、合法的な方法でプロレタリアートは自らを解放することができる、と主張した。これに対してはアベールが、その見解はブルジョワ的すぎる。協会の最終目標は社会革命であり、それは協同組合主義では実現できない、と反論した。

午後の会合ではスイスのイタリア語圏であるティチーノ代表のロセッティ（Rossetti）が、ジュラのメンバーが第一インターを2つに、すなわちラテン系とゲルマン系に分裂させてしまったのは遺憾だが、それはバーゼル大会の帰結だったとした。また、求められている知識人の排除に関しては判断が難しい。イタリアでは労働者は無知で、教育ある者が導かなければ解放を得られない、と主張した。さらに数人が発言したが、協会の分裂は個人的対立が原因で起こったのであり遺憾であるとする意見や、知識人の排除については、悪い知識人ばかりではないとする意見が多かった。最後にオーストリア代表のオーバーヴィンダーが、ジャーナリストという立場から予想されるように、知識人には確かにほら吹きもいるが、長くは影響力を持てなかった。そうした輩を閉め出せというのがパンフレットの趣旨なら、教会の坊主よりも狭量ではないか、と発言して午後の会合を終えた⁵²⁾

3. 議題と決議 (12日午前・夜, 13日午前・午後)

総評議会があらかじめ準備した議案は、次の5つであった。これをめぐる議論と決議に費やされたのは、大会最後の2日間であった。

1. 規約の改正, 2. 国際的に同職団体を結びつける組織, 3. 国際労働者協会をベースとした労働者の組織全般, 4. 組織された労働者の政治活動,
5. 一般的な労働統計⁵³⁾

1) 議案2と3

この2つの議題は、労働者の組織が国際的に協力し合うことの強調であった。大会は9月12日午前の公開会議で7つの具体的な決議を下したが、特に目新しい点は見られないので省略する。

2) 議案4 政治活動について

12日午前の会は、上の7決議を下すと政治活動に関する議論に移った。ファン・デン・アペーレは、協会の目的はあくまで労働者階級の経済的解放であるから、政治には関わらない方がよいと発言した。またチューリヒ支部を代表するヴェルヘルムも、どのように関わるかは支部の裁量に任せるよう主張せよと、支部から指示を受けていると発言した⁵⁴⁾ これらを受けてベッカーは次のような提案を行い、採択された⁵⁵⁾「大会は、労働者階級に対し、解放を目的とするあらゆる政治活動に参加することを勧める。しかし各国の同志に、状況に応じてどう動くかを定める自由を与える」。

ロンドン協議会以来マルクスらが目指したのは、政治活動を義務づけることであった。その上に立って、ハーグ大会は規約第7条のaとして、プロレタリアートを政党に組織することと、プロレタリアートによる政治権力奪取の必要性を明記したのである⁵⁶⁾ しかしベッカーのこの提案では、政治権力の奪取は言うに及ばず、党に組織することが必要であるという主張さえ満たしていない。最終的な裁量は各国労働者に任されるとしているからである。マルクスら

が築いた堤防は決壊したのである⁵⁷⁾

3) 議案5 総評議会が一般的な労働統計を確立するという項目

資料不足のため、大会は具体的議論を見送った。反対派の大会でも同様のことが起こっていた⁵⁸⁾ 当時この課題をこなすことは、協会の手に余ることだったのかもしれない。

4) 議案1 規約の改正

規約問題は、12日の夜8時からの会議、そして13日の午前中の会議で議論された。次のようなことが決議された。①年次大会は毎年ではなく今後は隔年で開催する。②総評議会のメンバー自己補充権は廃止する。規約改正委員会はさらに、総評議会の支部資格停止の権限も廃止しようと提案した。しかし、議論が紛糾したため決議はできなかった。③総評議会の所在地はニューヨークに据え置く。

①の提案の理由は、毎年開催では費用がかさむということであった。ファン・デン・アベレは、毎年集わなければ協会は死んでしまうと抗議したが功を奏さなかった⁵⁹⁾

②の総評議会のメンバー自己補充権の廃止については、『ザ・タイムズ』の記事にもベッカーの記事にも詳しい説明がない。しかし、これは協会創立当初からずっと認められてきたことであった。ベッカーの取り仕切る大会で、総評議会の権限縮小がこのようにあっさりとは決議された背景を考えると、特にパリ・コミュニケーション後に多くの活動家がロンドンに亡命し、メンバーとして総評議会に取り込まれたこと、中でもブランキ派は、1871年のロンドン協議会と翌年のハグ大会に向けて重要な役割を演じたが、その後協会を見限ったことが挙げられるであろう。これと似た提案として、規約改正委員会は総評議会の支部資格停止権限の廃止も提案した。しかし、反対意見が多く出て委員会案は立ち消えになった⁶⁰⁾

③評議会の所在地は規約には定められていないが、ペレらが配布したパンフレットには、そしてまったく立場の違うニューヨークの総評議会からの指示でもヨーロッパに移すべきだと主張されているから、それを受けて採決されたと思われる。『ザ・タイムズ』の記事には説明がないのでギョームに基づく、採決には18名が関わった。7名がジュネーヴに移転させることに賛成で、11名がニューヨークに留め置くことに賛成した。かくして、移転案は否決された⁶¹⁾

お わ り に

以上見たように、1873年9月の第2週に開かれた集権派の大会は、マルクス本人も認めるような大失敗 (Fiasko) に終わり、誰も記録を後世に残そうとしない、議事録の残っていない大会になった。そうなった最大の原因は、これまで総評議会を支持してきたジュネーヴのペレらの離反であり、協会の分裂を非難したパンフレットを彼らが大会中に配布したことだった。ところがベッカーはこのパンフレットの意義を極めて低く見て、総評議会代表もマルクスやエンゲルスも、さらには総評議会の代理人のセライエすらも来なかったのは、「当地では何の効力も挙げなかったペレー味の例のパンフレット」が理由らしいとしている⁶²⁾ ここにも、ベッカーとマルクスやエンゲルスの見方のずれが見て取れる。

ペレらの離反は、マルクスらにとっては飼い犬に手を噛まれた思いだったであろう。しかしジュネーヴの指導者たちは、初めからマルクスの飼い犬などではなかった。ジュラにはジュラの事情があり、運動があのように展開したのと同じように、ジュネーヴにはジュネーヴの事情があり、指導者たちは現実に即した方針を採用していたのである。ペレらが離反を起こした理由を一言で言うと、ハーグ大会で意に反して協会を分裂させられたこと、総評議会をニューヨークに移されたことであろう。それらにマルクスやエンゲルス、バクーニン、ギョームなどが深く関わっていた事実から、彼らは知識人への不信を露わにし

たのであった。

では逆に、ペレらがロンドン協議会までは積極的に、ハーグ大会ではすでに消極的ではあったにせよ、それでもマルクスらを支持していた理由は何であろうか。それを考えてみることで、ジュネーヴ派が総評議会のいいなりに動いたのではなく、自分なりの判断で行動していたことを示したい。

ハーグ大会までジュネーヴ派がマルクスらを支持したのは、ジュラ派に対抗するための、言ってみれば戦術的な必要悪にすぎなかった、と筆者は考える。原理の上でマルクスらとの共通点を探すとしたら、議会主義を否定しないということだけであった。しかし、ジュネーヴ派がそれによって考えていたのはブルジョワ政党と協力するという点で、それは実はマルクスらから唾棄すべきものと捉えられていたのである⁶³⁾。協会運営に関して、ジュラ派の取っているような反集権主義の立場をジュネーヴ派は取らなかつたとはいえ、スイス労働者同盟の方針に関しては、ジュネーヴ派も集権化に反対し、マルクスはそれを前述したように「偏狭な地方的利害にこり固まっている」と非難した⁶⁴⁾。このように、集権化という点でも、一般論としてはマルクスらとジュネーヴ派の立場は一致していなかつた。また「政治活動の重視」という点においても、ジュネーヴ派が守ろうとしたブルジョワ政党との協力というやり方をマルクスは決して支持していなかつた。マルクスらとジュネーヴ派の間には、実は原理的な意味での一致はほとんどなかつたと筆者は考えている。

(この論文は、2014年度松山大学特別助成金の成果の一部である。)

注

- 1) 拙著、時計職人とマルクス、同文館、1994年、第Ⅲ章～第Ⅴ章参照。
- 2) 拙稿「社会主義運動の舞台としてのジュネーヴ」、『国際都市ジュネーヴの歴史-宗教・思想・政治・経済-』昭和堂、2017年、掲載予定。
- 3) フリードリヒ・アードルフ・ゾルゲ (Friedrich Adolf Sorge 1826-1906) は、ドイツ系アメリカ移民で、古くからマルクスやエンゲルスの友人であり、アメリカ代表としてハー

グ大会に赴き、終盤には議長を務めた。総評議会のニューヨーク移転後には、新総評議会を率いることをマルクスらから期待されていたが、反対派の反感が強く、ハーグ大会では新総評議員に選ばれない恐れがあった。それを避けるため、同大会では新総評議会の候補として推薦されなかった。しかしその後補欠選挙で総評議員に選ばれ、その議長になった。

- 4) マルクス＝エンゲルス全集、第33巻、大月書店、1973年、495頁、Karl Marx Friedrich Engels Werke (以下 Werke と略)、Berlin, Dietz, Bd. 33, 1966, S. 605.
- 5) 紹介する12通の手紙は、次の箇所に収録されている。マルクス＝エンゲルス全集、第33巻、426-491頁、Werke, Bd. 33, S. 529-599.
- 6) ジェイムズ・ギヨーム (James Guillaume 1844-1916) は、第一インターのジュラ諸支部を率いたリーダーの一人。ハーグ大会に出席し、バクーニート同罪だとして組織からの除名を決議された。彼の残した次の回想録は、第一インターの歴史を記す資料として極めて重要である。James Guillaume, *L'Internationale, documents et souvenirs (1864-1878)*, tome 1, Paris 1905, tome 2, Paris 1907, reprint Volume 1 (1864-1872) Genève 1980, tome 3, Paris 1909, tome 4, Paris 1910, reprint Volume 2 (1872-1878), Paris 1985.
- 7) サン・ティミエ国際会議で下された4大決議とは次の4項目である。①ハーグ大会で下された決議も、選ばれた総評議会も認めない。②反対派の支部・連合は、協力して仲間の防衛にあたる。③プロレタリアートによる政治権力奪取という方針(いわゆる「プロレタリアート独裁」)の否定。④労働者の抵抗組織の重要性の確認。拙著、313～315頁。
- 8) テオドア・フリードリヒ・クーノ (Theodor Friedrich Cuno 1847-1934) は、ドイツ人の技師で、オーストリアやイタリアで第一インターの会員として活躍した後、ハーグ大会では総評議会支持の立場で、同盟問題調査委員会の議長を務めた。その後アメリカに渡り活躍した。
- 9) ハーグ大会に出席しマルクスらに協力したアルノー、クルネー、ランヴィエ、ヴァイヤンのブランキ派が、総評議会をニューヨークに移転させたことで第一インターは自殺を図ったと非難するパンフレット「インターナショナルと革命」を大会後に出版し、協会からの脱退を表明したことを指す。拙著、309頁参照。
- 10) ジョン・ハイルズ (John Hales 1839-?) はイギリス連合の指導者で、ハーグ大会に出席したが、代議権審査が終わらないうちに帰国し、大会に深入りしない態度を取った。拙著、283頁。しかし大会後は反対派を率いて、総評議会を支持する勢力と争っていた。
- 11) オーギュスト・セラリエ (Auguste Serrailier 1840-?) は、長い間総評議員を務めたフランス人の靴型工で、ロンドンに住んでいた。ロンドン協議会とハーグ大会にも出席し、マルクスらを支持する行動を取った。後述するように、1873年の年次大会にニューヨークの総評議会を代表してジュネーヴに行くよう要請を受けたが、結局行かなかった。
- 12) ヘルマン・ユング (Hermann Jung 1830-1901) は、ジュラ地方の町サン・ティミエでドイツ人の両親の間に生まれ、時計工の修業を受けた。その後26歳でロンドンに渡り、マ

ルクスらと知り合った。第一インターの創立以来ずっと総評議員を務め、多言語に通じていることを見込まれて1866年のジュネーヴ大会、68年のブリュッセル大会、69年のバーゼル大会、71年のロンドン協議会では議長を務めた。しかしハーグ大会を前にマルクスやエンゲルスがくり広げた陰謀めいた策略に嫌気がさして大会に出ることを拒否しただけでなく、大会後にイギリス連合評議会でマルクスらの行動を非難する証言を行った。拙著、325頁注41、また証言の内容については、同273~274頁参照。

- 13) ニコライ・ウーチン (Nikolai Utin 1845-1883) はロシアの活動家で、バクーニンの名声に惹かれて1867年にフランス語圏スイスに赴いたが、その後バクーニンと決裂し、以後バクーニンの天敵のような存在となった。編集権をめぐるいさかきを利用して、1869年秋に『エガリテ』紙の編集者の一人になった。マルクスに協力しジュラ派と対抗するため、1870年初めにジュネーヴに住む数名のロシア人を集めてロシア人支部を結成し、翌1871年にはロマン連合の代表としてロンドン協議会に出席した。拙著、152~153頁など参照。
- 14) フリードリヒ・ボルテ (Friedrich Bolte ?-?) は、ドイツ系アメリカ移民。ハーグ大会でニューヨークの新総評議会のメンバーに選ばれた。
- 15) この決定はマルクス=エンゲルス全集、第18巻、大月書店、1967年、には収録されていない。次の箇所にある。*La Première Internationale. Recueil de documents publié sous la direction de Jacques Freymond, tome 3, Genève 1971, pp. 20-21, Guillaume, L'Internationale, tome 3, pp. 55-56.*
- 16) ファン・ヘッデヘム (Van Heddehem 1847-?) は、「ワルテール Walter」の偽名でパリ支部代表としてハーグ大会に出席し、同盟問題調査委員会のメンバーとなった。1873年春に南フランスで実施された警察の手入れで捕まり、警察の密告者 (マルクス=エンゲルス全集、第33巻の人名索引では「刑事」) であることが判明した。
- 17) エミール・ダントレーグ (Émile Dentraygues 1836-?) は、エロー (Hérault) 県出身の鉄道職員で、「スワーム Swarm」の偽名でトゥールーズ支部の代表としてハーグ大会に参加し、マルクスらを支持する行動を取った。1873年春の南フランスでの警察の手入れで捕まり、仲間の名前を漏らした。警察のスパイであったかは不明。
- 18) 「国際労働者協会の全会員へ 1873年1月26日の総評議会決議」マルクス=エンゲルス全集、第18巻、709~710頁、Werke, Bd. 18, S. 692.
- 19) ヨハン・フィリップ・ベッカー (Johann Philipp Becker 1809-1886) は、ジュネーヴにおける第一インター・ドイツ語支部の創始者で、一時バクーニンの社会民主同盟にも加わったが、その後「改換」して忠実なマルクス派となった。1873年の時点では、マルクスらにとって、ジュネーヴに住む数少ない信頼できる人物であり、当時60歳を超える高齢だったため「老ベッカー」と親しみを込めて呼ばれた。拙著、55~56頁も参照。
- 20) バクーニンが1867年秋にジュネーヴで結成した社会民主同盟のこと。マルクスらによれば、この組織は「インターナショナルの中のインターナショナル」と呼ぶべき秘密組織

であり、認めることのできない存在であった。ハーグ大会でジュラ連合代表のギョームは、この組織に入っていることを理由に、バクーニンとともに除名された。拙著、第3章第1節、301～304頁参照。

- 21) 「社会民主同盟と国際労働者協会－ハーグ大会の命によって公表される報告書と記録文書」、マルクス＝エンゲルス全集、第18巻、322-426頁、Werke, Bd. 18, S. 330-471.
- 22) ジュネーヴで出されていた第一インター諸支部の機関紙。1869年秋まではバクーニン自身もしくは彼の仲間が編集権を握っていたが、その後ウーチンなどの反バクーニン派に編集権が移った。拙著、153～161頁参照。
- 23) ハイน์リヒ・オーバーヴィンダー (Heinrich Oberwinder ?-?) は、オーストリアのジャーナリストで、「シュヴァルツ Schwarz」の偽名でハーグ大会に参加し、マルクスらを支持する行動を取った。1873年の年次大会にも、ジュネーヴ在住でない数少ない代表として同じ偽名を使って出席し、総評議会派を支持する代議権をもたらした。
- 24) 次の決議で実行された。「国際労働者協会から全協会員へ」ニューヨーク、1873年5月30日付、マルクス＝エンゲルス全集、第18巻、710～711頁、Werke, Bd. 18, S. 693.
- 25) 初めて全スイスの労働者を集める会議として6月1日～2日にスイス中央の町オルテンで開かれた大会には代表80名が集まった。様々な勢力が集まったが、まだ寄り合い所帯の域を出なかった。集まったグループは、最大派閥がスイス人だけを会員とする愛国的なグリュートリ協会、次いでチューリヒのドイツ語グループ多数派と、ヘルマン・グロイリヒを中心とし、彼が編集する『タークヴァハト』を機関紙とする少数派、ジュネーヴ代表、ジュラ代表などであった。ジュネーヴのロマン連合は、団体としては代表を送らず個人参加だった。ジュラ連合は、2名を連合代表として送り、さらに個別支部の代表として3名が赴いたので、ジュラからの代表は合計5名であった。①スイス人だけの利害を代表すべきか否か、②労働組合としての性格を前面に出すか政党を目指すか、③組織をどの程度中央集権化させるか、④政治活動に重きを置くか、など様々な論点が交錯してまとまらなかった。ジュラの代表は、特に最後の点で大会多数派と相容れず、国家に期待する方針に反対する声明を出してそれ以後の議論に加わらないことを宣言し、単なる見学者として会議に残った。Guillaume, *L'Internationale*, tome 3, pp. 72-79, Erich Gruner, *Die Arbeiter in der Schweiz im 19. Jahrhundert*, Bern 1968, S. 744-752.
- 26) 書簡41～44は、マルクス＝エンゲルス全集、第33巻、74～80頁、Werke, Bd. 33, S. 85-91, 書簡253は同全集、495～498頁、Werke, Bd. 33, S. 605-607。なお、「書簡」としているが電報の場合もある。
- 27) アンリ・ペレ (Henri Perret ?-?) は、結成当初からのロマン連合の書記で、実質的なジュネーヴ派のリーダーであった。一時的にバクーニンの社会民主同盟に所属したが、1869年からはそれに激しく反発した。ロマン連合を代表してロンドン協議会に出席し、マルクスらを支持する行動を取った。しかしハーグ大会には出席せず、この頃から総評議会への信頼が揺らぎ始めた。それと同時にマルクスらに対する反感が強まっていき、ついに

はそれを集大成したパンフレットをジュネーヴ大会の場で披露するに至った。

- 28) オルテンの労働者大会において、組織の中央集権化を目指す決議が下されたことに対して、ジュネーヴの代表たちが不満を抱いていたことを指す。マルクスは「偏狭な地方的立場」と批判しているが、この点に不満を抱いたのはジュラ代表も同じであった。フランス語圏スイスの住人が、スイス全体から見れば言語的少数派であるのは否定できない事実であり、彼らは常にドイツ語圏による中央集権化には否定的であった。こうした事情を理解せず、マルクスが「偏狭な地方的立場」と一蹴していることは、彼がスイスの内情をまったく理解していなかったことを示している。
- 29) 正確には、イギリス代表2名、ベルギー代表5名、スペイン代表5名、フランス代表3名、オランダ代表1名、イタリア代表4名、ジュラ代表8名で、重複分を差し引くと、実質24名であった。前掲拙稿「国際社会主義運動の舞台としてのジュネーヴ」、『国際都市ジュネーヴの歴史-宗教・思想・政治・経済-』昭和堂、2017年、掲載予定参照。
- 30) ジュネーヴでは、前年の年次大会を地元で開催できなかったために不満が鬱積していた。ハーグ大会前にペレが総評議員会のユングに書いた手紙参照。*La Première Internationale. op. cit. tome 4, Genève 1971, pp. 224-225.*
- 31) *Briefe und Auszüge aus Briefen von Joh. Phil. Becker, Jos. Dietzgen, Friedrich Engels, Karl Marx u. A. an F. A. Sorge und Andere, Stuttgart 1921, S. 119, 124-125.*
- 32) フレモン前掲書、第4巻、625頁注251。ヨハン・ゲオルク・エッカリウス(Johann Georg Eccarius 1818-1889)は、1848年革命以前からのマルクスやエンゲルスの友人で、ロンドンに赴き第一インター創立大会に参加した。その総評議員をハーグ大会まで(1864~1872年)務めた。しかし、スイス人のユング同様、ハーグ大会に臨むマルクスやエンゲルスの姿勢に疑問を持ち、その後彼らから離れて反権威派のイギリス連合評議会に加わり、マルクスらを批判する発言を行った。後掲注63参照。
- 33) 大会の会場としては、本来「タンブル・ユニック Temple Unique」が考えられていた。これはもとフリー・メイソンの会館で、その後ロマン連合が買い取った建物だった。しかし、活動が衰えていたこの時期、ロマン連合にとってこの建物は広すぎ、また維持費もかかりすぎた。そのため、建物は「教皇至上主義者」たちに1873年秋に売却され、その後教会に造りかえられた。ジュネーヴ派は完全に自分たちの味方だと考えていた、ペレらの離反を知る前の段階の総評議員派は、建物の所有権を理由に、反対派が押しかけて来て閉め出せるという点で、この建物には利点があると考えていた。しかし売却されたので、このあては外れた。同書、614頁注156。
- 34) 同書、193~196頁。
- 35) 同書、197~198頁。
- 36) 同書、640頁以下、注355参照。ただし、その箇所では氏名を特定されているのは19名だけである。
- 37) 同書、173~176頁に収録。もとはゾルゲが英語で書いたようだが、誰が仏訳したかには

異論がある。マルクス＝エンゲルス全集、第33巻、612～613頁、注110 (Werke, Bd. 33, S. 727) は、訳者はエンゲルスだと推察している。しかしフレモン (616～617頁) では、この時期エンゲルスはロンドンを離れていたから、その可能性は低いとしている。

38) 同書、199～200頁。

39) 同書、201頁、その新聞とは、ウィーンで発行された『ノイエ・フライエ・プレッセ Neue Freie Presse』で、その通信員はおそらくオーバーヴィンダーであった。同書、630頁注272。

40) 同書、182頁。

41) 同書、182頁。

42) 同書、170頁。

43) 同書、201頁、630頁注275。1833年に「再生」政府によって創立されたチューリヒ大学は、1867年に初めて女子学生の在籍を認め、その後も東ヨーロッパからの女子学生を受け入れ続けた。当時女子学生の在籍を認める大学は少なく、これは画期的であった。<http://www.uzh.ch/de/about/portrait/history.html> ローザ・ルクセンブルクも1889年にチューリヒ大学の哲学科に入学し、97年にはポーランドにおける工業の発達というテーマの博士論文で博士号の学位を得た。<http://www.rls.pl/en/rosa-luxemburg>

44) 同書、202頁。

45) 同書、202～203頁。グーツマンの発言は、労働者大会への出席者の面で、本稿の把握と2名ずれがある。注25参照。

46) 同書、203～206頁。

47) 同書、198頁。エッカリウスもこの茶番をからかい、アベールを「omniprésent 二股出席の」と形容している。なお、総評議会を支持するハーグ支部はエッカリウスによると、多くはドイツ系の機械工から成っていた。

48) パンフレットの全文は、次の箇所にある。同書、228～238頁。

49) 現に、オーストリアから来たオーバーヴィンダーは、後述する「ドクターと教授」とはマルクスとバクレーニンのことだと誤解していたと次の文献にある。同書、630頁注272。

50) ピエール・クルリー (Pierre Coullery 1819-1903) はジュラ地方北部の町ボラントリュイ (今日ではカントン・ジュラに所属) で下層農民の家庭に生まれ、苦学して医師の資格を取った。1848年革命以前から社会主義に開眼し、ベルンで「改革協会」を組織し、またドイツ語の新聞『労働者 Der Arbeiter』を出版したが短命に終わった。49年にはカントン議会の補欠選挙で議員に選ばれたが、急進的すぎて完全に浮いた存在であった。60年代に入って第一インターの時代が来ると、彼はラ・ショー・ド・フォンで支部を結成し、ジュラ地方における運動の先駆者となった。1866年のジュネーヴ大会、67年のローザンヌ大会に出席したが、69年にジュネーヴとジュラ地方の諸支部をまとめるロマン連合が結成される過程で、ジュラにおける主導権は若いジェイムズ・ギヨームに、また連合全体の主導権はジュネーヴ (当時機関紙『エガリテ』を編集していたのはバクレーニンであった) に奪

われた。拙著、第二章、第3～5節、参照。

- 51) 『未来の声 La Voix de l'Avenir』のこと。詳しくは拙著、65頁以下参照。
- 52) フレモン、同書、213～215頁。
- 53) 同書、163頁。
- 54) 同書、216頁。
- 55) 大会決議は、最初ドイツの社会民主労働党の機関誌である‘Volksstaat’に載った。記事を書いたのはベッカー本人であった。‘Politische Uebersicht’, Volksstaat, 24. 9. 1873. ベッカーは、さらに同紙10月5日号と8日号に、反権威派とマルクス派両方のジュネーヴ大会に関する報告記事を書いている。その中で注目されるのは、5日の記事で彼が、反対派の会議には手の労働者が7名ないし4名しかおらず、19名は頭脳労働者であったこと、他方で8日の記事では、マルクス派の会議には頭脳労働者は4名しかおらず、他はすべて手の労働者であるとしていることである。それによって、正統な労働者の大会は自分たちであると主張したがっているのである。この点は20世紀初頭のサンディカリズムを思わせるが、ジュネーヴにおける敵対者となったペレらの主張にベッカーも同調していたことを示している。他方でジュラのギヨームは、頭脳労働者の軽視を論難している（拙稿「社会主義運動の舞台としてのジュネーヴ」、『国際都市ジュネーヴの歴史－宗教・思想・政治・経済－』昭和堂、2017年、掲載予定参照）。また当然のことながら、マルクスもこのような単純な「労働者主義」には反対であった。実際、前掲したゾルゲへの手紙（書簡253）では、この頭脳労働者を閉め出そうとするペレらの動きを「ジュラの連中よりもっとひどい」としている。大会を流産させるという方針でマルクスらと食い違っただけでなく、まっとうな労働者の大会、ということは何を基準として捉えるかにおいても、ベッカーはマルクスとは相当にずれていたと言えよう。
- 56) マルクス＝エンゲルス全集、第18巻、143頁。
- 57) エッカリウスもこの決定の性質を正しく見抜いていた。この決定が下された時の出席者がわずか12名だったことを受けて彼は、「ハーグ大会で20名の少数派が成し遂げようとしてできなかったこと〈20 délégués avaient été 〈à〉 faire〉をこの時わずか12名が30分で成し遂げた」、としている。フレモン同書、216頁。
- 58) 拙稿「社会主義運動の舞台としてのジュネーヴ」、『国際都市ジュネーヴの歴史－宗教・思想・政治・経済－』昭和堂、2017年、掲載予定参照。
- 59) フレモン同書、217頁。
- 60) 同書、219～220頁。より正確には、「総評議会の資格停止権限は残すが、その処分に対し各国支部・連合はそれを妥当と考えるかを投票で6週間以内に意志表示する」という条件付きであった。
- 61) ギヨーム前掲書、136頁。
- 62) *Briefe und Auszüge*…, Stuttgart 1921, S. 123.
- 63) ジュネーヴ派の支持した政治への参加とは、カントン議会選挙などにおける急進派との

協力で、イギリスで「リブ＝ラブ主義」と呼ばれた、自由党との選挙協力と同じ性質のものであった。ところがマルクスは、1873年2月12日付のボルテへの手紙(書簡235)の末尾に、「エッカリウスはロンドンのもぐりの大会でおめでたくも言っただけでしたが、ブルジョワたちと政治をやらねばならないのだ、と」と書いている(マルクス＝エンゲルス全集、第33巻、461頁、Werke, Bd. 33, 566.)これは、1873年1月26日にロンドンで開かれた、反総評議会派の大会におけるエッカリウスの発言を受けている(フレモン前掲書、第3巻、229～230頁。エッカリウスはこのような戦術を取りうるのは、スイスとイギリスとアメリカの3国だけであると発言している。また、エッカリウスのこの考えは、イギリス連合全体の賛成を得ていたわけではなく、彼個人の考えに近かった)。いずれにせよ、このようにエッカリウスをけなすとしたら、原理上マルクスがジュネーヴ派とは手を結べなかったであろうことは明らかである。

64) 前掲注28参照。